

# 『エウテュプロン』と 『ソクラテスの弁明』の連続性について

小 島 和 男

## 1. 本小論の目的

『エウテュプロン』の研究は、これまで数多くあるが、主としてそれは二つの観点からによるものであった。一つは「敬虔」が主題として扱われていることから、ソクラテスと宗教という観点からの研究<sup>1)</sup>、もう一つは、この作品にイデア論の萌芽が見られるという観点からの研究である<sup>2)</sup>。

ソクラテスと宗教という観点からの研究は、この作品のソクラテスを歴史的ソクラテスのように取り扱い、周辺資料その他からソクラテスと宗教の関係を探るといようなものが多い。他方、イデア論の萌芽が見られるという観点からの研究は、執筆年代決定論に則り、中期で完成されるイデア論の原型をこの作品に見出すというものであった。だが、これらのうち、いずれの観点からの研究においても、結局のところ、『エウテュプロン』からプラトンの主題的な主張を引き出すことにも、『エウテュプロン』という作品の持つ意義を見出すことにも、成功していないように思われる<sup>3)</sup>。

確かに、『エウテュプロン』は非常に短い対話篇であるが故に、その中にプラトンの積極的な主張を看取することは、一見困難にも思われる。というのも、まずはソクラテスとエウテュプロンの対話そのものがアポリアに終わっているということがあげられよう。さらには、エウテュプロンが

『エウテュプロン』と『ソクラテスの弁明』の連続性について（小島）

最後にソクラテスのもとから立ち去る際に、エウテュプロンがどのような意図でもってその場を離れたのか、つまり、ソクラテスに対して反発した上でのことなのか、同意した上でのことなのか、作品の中では明らかにされていないのである<sup>4)</sup>。

しかし、他方ソクラテスの方はといえば、明らかである。『エウテュプロン』後、ソクラテスは裁判にかけられることになる。その裁判の様子をプラトンは『ソクラテスの弁明』において描いているわけである。

そこで、本小論では、そのように場面設定上連続している『エウテュプロン』と『ソクラテスの弁明』の間に、単に場面設定上の連続性にとどまらない、プラトンの主張としての連続性があるということを示したい。そしてその連続性においてこそ、プラトンの著作における『エウテュプロン』という作品の持つ意義が見出せるように思われるのである。

## 2. ソクラテスとエウテュプロンの共通点

『エウテュプロン』という対話篇の冒頭において、エウテュプロンとソクラテスは、バシレウスの役所の前で出会う。そこでソクラテスはエウテュプロンに、自分がメレトスに訴えられていることを語る。そのメレトスをソクラテスは、

*καὶ φαίνεται μοι τῶν πολιτικῶν μόνος ἄρχεσθαι ὀρθῶς*

そして私が思うには国事を彼だけが正しくは始めているのだ  
(*Eutphr.* 2c8-d1)。

と賞賛する。この発言は皮肉としても受け取られるだろうから、発言の真意も問題となるが<sup>5)</sup>、ここで着目したいのは、続く台詞の中で、ソクラテスがエウテュプロンと自分を一括りにしている点である。

*καὶ δὴ καὶ Μέλητος ἴσως πρῶτον μὲν ἡμᾶς ἐκκαθαίρει τοὺς τῶν νέων  
τὰς βλάβστας διαφθείροντας, ὡς φησιν*

実にメレトスもおそらく、まずははじめに私たちを除去しようという  
のだ、彼の言うようには、若者を、新芽を駄目にする者だとしてね  
(*Eutphr.* 2d4-3a2)。

ここでは、ソクラテスが自分とエウテュプロンをまとめて「私たち」と  
言っている点に注意したい。メレトス及びその仲間たちが裁判に訴えている  
のはソクラテスのみであり、エウテュプロンは含まれない。よってここ  
でソクラテスが自らとエウテュプロンを同列に扱っているのは、そのよ  
うな点、訴えられているという点ではない。しかし、先の皮肉的な発言で、  
「彼だけが (μόνος)」というように、メレトスに対するものとして、ソク  
ラテスはエウテュプロンと自分を一括りにしていることは読み取れよう。  
エウテュプロンは実際は訴えられてはいないにせよ、ソクラテス同様、対  
メレトス的な人物であるとソクラテスは考えているものとしてプラトンは  
描いている。つまり、そういった意味においては、それが本質的なもので  
あるにせよないにせよ、ソクラテスがエウテュプロンを自分と同じような  
人物であると捉えているというように、プラトンが描いていることは確か  
なのである。

では、はたしてエウテュプロンは、どのような点で、対メレトス的な人  
物でありソクラテスと同じだということになるだろうか。続く対話では、ソク  
ラテスが、自分はどのような主張で訴えられているのかを語り、その事態に  
対して、エウテュプロンは激しく共感し、同情する。ここからその答えが  
読み取れる。

*Μανθάνω, ὦ Σώκρατες· ὅτι δὴ σὺ τὸ δαιμόνιον φῆς σαυτῷ ἐκάστοτε  
γίγνεσθαι. ὡς οὖν καινοτομοδντός σου περὶ τὰ θεῖα γέγραπται ταύτην  
τὴν γραφήν, καὶ ὡς διαβαλῶν δὴ ἔρχεται εἰς τὸ δικαστήριον, εἰδὼς ὅτι*

εὐδιάβολα τὰ τοιαῦτα πρὸς τοὺς πολλοὺς. καὶ ἐμοῦ γάρ τοι, ὅταν τι λέγω ἐν τῇ ἐκκλησίᾳ περὶ τῶν θεῶν, προλέγων αὐτοῖς τὰ μέλλοντα, καταγελωσιν ὡς μαινομένον· καίτοι οὐδὲν ὅτι οὐκ ἀληθὲς εἴρηκα ὧν προεῖπον, ἀλλ' ὅμως φθονοῦσιν ἡμῖν πᾶσι τοῖς τοιούτοις. ἀλλ' οὐδὲν αὐτῶν χρῆ φροντίζειν, ἀλλ' ὁμῶσε ἶεναι.

それはあれですよ、ソクラテス。その理由は、あなたがことあるたびに自分にはダイモンの合図が現れると言っているからですよ。それで彼はあなたを神々に関する事について新しくする者だとしてその公訴状を書き、中傷してやろうと思って裁判所に出かけるわけです。このようなことが大衆相手には格好の中傷の種だということを彼は知っているのです。実際、実に私もですね、私が民会で何か神々に関する事を発言して、これから起こることどもを彼らに予言すると、彼らは私が狂っていると、嘲笑するのです。私が予言したことで真実でないことは何一つ言って来なかったというのにもかかわらず、彼らは私たちのような人々全員をそねむのです。ともかく、彼らのことなど一つも気にかけず、立ち向かうべきですよ (*Eutphr.* 3b5-c5)。

この共感と同情からは少なくともエウテュロンはソクラテスも自分も、大衆からそねまれていると判断していることがうかがえる。この後ソクラテスはそのように嘲笑されたりすることは問題ないと語り、ただ嘲笑されるだけであればいいが、自分に対してはアテナイ人たち大衆は本気なのではないかと語る。メレトスは、もちろんこの場合、大衆側の人物だということになる。そのような嘲笑か本気かという程度の差はあるにせよ、つまるところ、ソクラテスとエウテュロンは「神々に関する事で何か主張をし大衆に反感を抱かれている」という点で共通しているということになる。

### 3. 対話篇の流れと「余剰」

しかし、その後で、対話が「敬虔・不敬虔」とは何であるかという話に差しかかった直後、その神々についてのソクラテスとエウテュプロンの見解にかなりの相違があることが明らかになる。

5d7-6c4 で、エウテュプロンは、ソクラテスの「敬虔・不敬虔」とは何かという問いに、父親であれ誰であれ不正を犯した者を訴えることが敬虔であり訴えないことが不敬虔である (定義①) と語り、ウラノス・クロノス・ゼウスの話を出す。クロノスは父ウラノスに報復し、ゼウスもまた父クロノスを追放している。神々の間でも父が不正をすれば子が報いているのにどうして自分が父を訴えてはいけないのかとエウテュプロンは語るわけである。

それに対してソクラテスは、「初期対話篇」という名称で括られる作品に極めてよく見られる方法で論駁を開始する。つまり、ある抽象的な概念を明らかにする際、その例示ではなく、定義をもって答えることを要求するやり方でもって対話を進めていくのである。そのエウテュプロンの答えは、敬虔なことの例を答えているのであって、敬虔そのものを答えてくれているわけではない、とソクラテスは語る。例示ではなく、「敬虔」であれば、「敬虔」というそれそのものが何なのかを答えて欲しいというのである。

それ以降の対話の流れは以下のようになっている。

「敬虔」とは神に愛されるもの (定義②)

神々の間に争いがあるので同じものがある神には愛され別の神には愛されない、同じものが敬虔であったり不敬虔であったりしてしまう。



「敬虔」とはすべての神々に愛されるもの (定義③)

敬虔なものは敬虔であるから愛されるのであり、「すべての神々に愛される」というのは敬虔そのものを答えているのではなく、それに付属する性質を答えているにすぎない。



「敬虔」とは「正しいもの」の神々への世話にかかわる部分 (定義④)  
その「世話」とは何か。



「敬虔」とは神々への奉仕術 (定義⑤)  
神々はその奉仕によって何を達成するのか。



「敬虔」とは神々への請願と贈物の知識 (定義⑥)  
その贈物は「神々に愛されるもの」となり、定義③に戻ってしまう。

定義②の論駁において、ソクラテスは、神々の間に争いがあるということをも前提とする。もちろんそれは先の箇所 5d7-6c4 においてエウテュブロンがそういったことを語っているからなのであるが、そこでのソクラテスの発言に注目したい。

Ἄρα γε, ὦ Εὐθύφρων, τοῦτ' ἔστιν οὐ ἔνεκα τὴν γραφὴν φεύγω, ὅτι τὰ τοιαῦτα ἐπειδὴν τις περὶ τῶν θεῶν λέγῃ, δυσχερῶς πως ἀποδέχομαι; διὸ δὴ, ὡς ἔοικε, φήσῃ τις με ἐξαμαρτάνειν. νῦν οὖν εἰ καὶ σοὶ ταῦτα συνδοκεῖ τῷ εὖ εἰδότει περὶ τῶν τοιούτων, ἀνάγκη δὴ, ὡς ἔοικε, καὶ ἡμῖν συγχωρεῖν. τί γὰρ καὶ φήσομεν, οἳ γε καὶ αὐτοὶ ὁμολογοῦμεν περὶ αὐτῶν μηδὲν εἰδέναι; ἀλλὰ μοι εἰπέ πρὸς Φιλίου, σὺ ὡς ἀληθῶς ἠγῆ ταῦτα οὕτως γερονέναι;

するとエウテュブロン、このことが私が公訴された理由なのだろうか、つまり、人が神々についてそのようなことどもを語ると、私はきまって気難しくなってどうにも受け入れないということが。おそらく、実

にその為、人は私が罪を犯していると主張するわけだ。ところが今、そのようなことどもについてよく知っているきみまで、それらに賛成するのなら、どうにもこうにもきみたちに従わないわけにはいかなそうだ。だって、それらについては何一つ知らないと実に自分たち自身でも認めている私たちに一体何が主張出来るだろうか。しかし、友情の神にかけて私に言ってくれ、本当の本当にきみはそれらが事実そのように起こったとみなしているのかね (*Eutphr.* 6a7-b4)。

*Καὶ πόλεμον ἄρα ἤγῃ σὺ εἶναι τῷ ὄντι ἐν τοῖς θεοῖς πρὸς ἀλλήλους, καὶ ἔχθρας γε δεινὰς καὶ μάχας καὶ ἄλλα τοιαῦτα πολλά, ὅλα λέγεσθαι τε ὑπὸ τῶν ποιητῶν, καὶ ὑπὸ τῶν ἀγαθῶν γραφέων τά τε ἄλλα ἱερὰ ἡμῖν καταπεποίκιλται, καὶ δὴ καὶ τοῖς μεγάλοις Παναθηναίοις ὁ πέπλος μεστὸς τῶν τοιούτων ποικιλμάτων ἀνάγεται εἰς τὴν ἀκρόπολιν; ταῦτα ἀληθῆ φώμεν εἶναι, ὦ Εὐθύφρων;*

ではきみは本当に神々の間でお互いに対しての戦争なんてものがある  
とみなしているのかね、実に恐ろしい敵意や、戦闘、その他のたくさん  
のそのような、詩人たちによって語られ、またすぐれた画家たちによ  
ってあちこちの神殿が様々に飾られているようなことども、特に大  
パンアテナイア祭のときにはそのような刺繍でいっぱい飾られた礼  
服がアクロポリスに運び上げられるわけだが、そのようなことどもが  
あると。それらが真実であると私たちは主張したものかね、エウテュ  
プロン (*Eutphr.* 6b7-c4)。

この二つの発言から、ソクラテスが、神々の間に争いなどがあるような  
ことはない、と思っっているということは明らかであろう。ソクラテスは、  
『神統記』で語られているような出来事もあったことを認めず、受け入れ  
ようとはしない人物であったわけである。ここから、『国家』などにおけ  
るホメロス批判などが連想されましょう。プラトンがソクラテスをこのよ

『エウテュプロン』と『ソクラテスの弁明』の連続性について（小島）

うな発言をする人物として描いたのは特におかしなことではない。

しかし、『エウテュプロン』という作品の流れを見てみると、これは不自然である。

というのも、「神々の間で争いがある」ということは、定義②の論駁において必要不可欠な前提となっているのである。その前提をそのまま使ってソクラテスは、定義②を論駁するわけであるから、敢えて否定をする必要はなく、むしろ否定をせずに対話を進める方が、エウテュプロンを論駁する流れだけを考えれば、自然であろう。

また、そう考えていくと、定義②の部分もどうか。というのは、定義③の論駁である、「敬虔そのものを答えているのではなく、それに付属する性質を答えているにすぎない」は定義②の論駁としても通用するからである。つまり、より自然な流れとして、読者は以下のように想定出来るのである。

エウテュプロンによる定義①（父親であれ誰であれ不正を犯した者を訴えることが敬虔であり訴えないことが不敬虔）の提出。ウラノス・クロノス・ゼウスの話。

↓

ソクラテスは、ウラノス・クロノス・ゼウスの話にはふれず、例示ではなく「敬虔」そのものが何なのかを答えて欲しいと言う。

↓

定義②（「敬虔」とは神に愛されるもの）の提出。

↓

敬虔なものは敬虔であるから愛されるのであり、「神に愛される」というのは敬虔そのものを答えているのではなく、それに付属する性質を答えているにすぎない。

↓

（以下、定義④の提出以降そのまま）

とすると、「神々は争う」といったような神概念に関してソクラテスが反意を示す 6a 付近から、定義③の論駁に入る 9e の前までの部分を省略しても、エウテュプロンをアポリアに陥らすことは出来ることになる。また、所謂アイデア論の原型の提出ということに関しても、6a 付近から 9e の前までの部分を省略したところで、問題はないように見える。つまり、この部分は、アポリアに持っていく為の論駁の流れにおいては、言わば「余剰」にすぎないのである。

では、何故プラトンはこの「余剰」とも言える部分を、『エウテュプロン』というこの対話篇に入れたのであろうか。

#### 4. 「余剰」の挿入理由

流れを見ていきたい。2 節で述べたように、ソクラテスとエウテュプロンの共通点は、「神々に関することで何か主張をし大衆に嘲笑されている」という点であり、そのことがまずは描かれていた。次に問題の部分に移行するわけだが、ここでは逆に、エウテュプロンとソクラテスの「神」概念の違いが浮き彫りにされていると言える。ソクラテスは、エウテュプロンの持つ伝統的な「神」概念、『神統記』にあるような互いに争うこともある「神」概念に対して、その点については明らかに否定しているのだ。ソクラテスとエウテュプロンは、大衆からは同じように見られているが、実のところ彼ら自身において、「神」概念に関しては、異なっているのである。

もちろん、大衆からは同じように神についておかしいことを言っている人と受け止められているとはいえ、一方のソクラテスは裁判にかけられ、他方エウテュプロンにはそういったことはなくむしろ自分から訴訟を起こしているというように、大衆からの危険視の程度といった面では、いくらか違いがあったのかもしれない。だが、少なくとも、2 節で明らかにした

『エウテュプロン』と『ソクラテスの弁明』の連続性について（小島）

ように、ソクラテスにもエウテュプロンにも、二人をまとめる、言わば同業者のような含みを持たせて、プラトンが語らせているのもまた、確かなのである。

けれども、その直後、ソクラテスは伝統的な「神」概念を完全に否定するとはいかなないまでも、かなり疑問視し、それは受け入れがたいということを表明する。以後の論駁の流れとは不自然な形で、これが、3節で指摘した「余剰」である。

そして「敬虔」に関する対話は堂々巡りに終わる。エウテュプロンの出す諸定義は、いずれも当時のギリシア人の常識的な概念だとは研究者たちが認めるところではあるが、どれもソクラテスは論駁してしまうのである。

結果として導かれるのは、「敬虔」ということについては分からないままに終わるソクラテスである。だが、それでは『エウテュプロン』の流れにおける「余剰」とも言うべき、5d7-6c4のソクラテスによる伝統的な「神」概念の否定の部分は、やはり「余剰」のままに残ってしまうことになるだろう。では、この「余剰」をどうしてプラトンは挿入したのか。その理由を、『エウテュプロン』という作品の中にとどまったまま見出すのは、第3節での分析からも明らかなように、非常に困難である。

そこで注目したいのが、『ソクラテスの弁明』の以下で扱う箇所である。

## 5. メレトスに対するソクラテスの論駁の方法

『ソクラテスの弁明』においてソクラテスは、最近の告発者たちであるメレトスたちの主張をまとめる。それはソクラテスが2つの点で不正を犯しているというものである。一つめはソクラテスが若者を墮落させているということ、二つめはソクラテスが国家の認める神々を認めず別の新奇なダイモンを認めているということである。

一つめの点について、ソクラテスはメレトスの主張を二段階に論駁する。まずは、「何者かをすぐれた者にするのはいつでも一人か少数の人間のす

ることで、駄目にするのが大多数の人間のすることなのだ」ということで論駁し、次に「自分が邪悪な国民たちと暮らしたいはずはないのだから、自分は若者を墮落させていないか、もし若者を墮落させているとしても故意ではない、もしそうだとしたら故意ではないのだから懲らしめではなく学び知ることが必要なのであり、法廷に引っ張り出すべきではなかったのだ」と論駁する。これは所謂「ソクラテスのパラドックス<sup>6)</sup>」、つまり「人は故意に悪をなさない」の援用であろう。

しかしその中で、ソクラテスは単なる論駁にとどまらず、自身の主張を明確に打ち出していることに注意したい。それは「何者かをすぐれた者にするのはいつでも一人か少数の人間のすること、駄目にするのが大多数の人間のすることなのだ」という主張である。この主張は少し強引に思われる。ソクラテスは、馬の例を出してからこの主張を展開するわけだが、それには論理的な根拠付けは全く無い。

*οὐχ οὕτως ἔχει, ὦ Μέλητε, καὶ περὶ ἵππων καὶ τῶν ἄλλων ἀπάντων ζῴων; πάντως δήπου, ἔάντε σὺ καὶ Ἄνυτος οὐ φήτε ἔάντε φήτε· πολλὴ γὰρ ἂν τις εὐδαιμονία εἴη περὶ τοὺς νέους εἰ εἷς μὲν μόνος αὐτοὺς διαφθείρει, οἱ δ' ἄλλοι ὠφελούσιν.*

こうではないのかね、メレトス君、馬についても他のすべての動物についてもだ。実に全くそうなのだよ、きみとアニュトスが反対しようが賛成しようがね。というのは、若者たちについて、ただ一人が彼らを駄目にし、他方で他の人々は利するのであったなら、何かとんでもなく幸運なことだっただろうからね (Ap. 25b5-c1)。

プラトンはソクラテスにそう断言させ、話を先に進めるのだが、確かにこの主張、「何者かをすぐれた者にするのはいつでも一人か少数の人間のすること、駄目にするのが大多数の人間のすることなのだ」という主張と同様の主張は他の対話篇にも見られ<sup>7)</sup>、ソクラテスの経験則に基づく基

本的な実感ともとれる。

二つめの点については、ソクラテスはメレトスに、「ソクラテスは神々の存在を全く認めていない」とメレトス自身は主張しているのだ、ということを確認させた後で、「神々に関わりのあるダイモニオン<sup>8)</sup>の存在(「ダイモンの合図」)を認めるが神々の存在は認めない、などという者はいない」ということをソクラテスは主張し、メレトスを論駁したことになっている。ここで気になるのが、ソクラテスは決して、自分が国家の認めている神々を認めているとは言っていないという点である。

二つめの点についての論駁をもう少し詳しく見てみよう。ソクラテスはメレトスに、彼が以下の二つのうちどちらの理由でソクラテスを弾劾するのかということを探る。メレトスが主張するのは、「ソクラテスが国家の認める神々ではない別の神々の存在を認め、説いている」ということなのか、それとも「ソクラテスが全く神々の存在を認めておらず、そう説いている」ということなのか。後者だと答えるメレトスについて、ソクラテスは矛盾していると断言する。何故かというと、訴状の中でメレトスは、ソクラテスは神に関するものであるダイモンの存在を認めていると明言しているからだ。Aに関するものどもの存在を認める者は、必然的にAの存在も認めていることになる、という論理から、メレトスの主張は矛盾に陥り、論駁されてしまうわけである。ここでは、ソクラテスは神々に関わるものども、すなわちダイモンの存在を認めているので、やはり神々の存在それ自体は認めているということになるだろう。

つまり、二つめの点の論駁においては、一つめの点の論駁と比べてみるとよくわかるのだが、ソクラテスは一度、メレトスの主張を巧みに言い換えさせているのである。そして、それにメレトスはのったままになってしまっている。プラトンは少なくともそう描いている。

結局ソクラテスは、メレトスの当初の告発である「ソクラテスが国家の認める神々を認めず別の新奇なダイモンを認めている」という主張が、実のところ「ソクラテスが全く神々の存在を認めておらず、そう説いてい

る」という主張であったとメレトス自身に認めさせる（無理やり言い換えさせる）ことにより、メレトスを論駁することに成功する。だがそれは、メレトスの当初の告発それ自体をソクラテスが退けたことにはならない。メレトスの主張内容をメレトス自身に言い換えさせ、変更させて、ソクラテスは変更したそれを論駁したにすぎない。実際、ソクラテスは決して、自らが国家の認める神々をその通りに認め、崇めている、などとは言っていない。ここで言う「その通りに」というのは、「オリュポスの神々を伝え聞かされているその神話の通りに」と換言しても差し支えはないだろう。つまり、ソクラテスはメレトスの当初の告発内容を否定してはいないのである。では何故ここでプラトンは、ソクラテスにメレトスの告発に対して直接的な論駁をさせることなく、このように間接的な方法で以って論駁させたのだろうか。

## 6. 結論

これまでで明らかとなった通り、『エウテュロン』において描かれたソクラテスは、神々の存在それ自体は認めるものの、伝統的な「神」概念は否定していた。『ソクラテスの弁明』のこの箇所においてソクラテスが、メレトスの告発を直接論駁することをしなかった者として描かれているのは、正にこの点と同様のソクラテスの特徴を描いているのだ考えることによって、整合的に理解されよう。つまり、ここにおいて描かれているソクラテスの「神」概念が、アテナイ人たちの「神」概念とは別物であったと理解するならば、彼が自らの正しさを保ちつつかつ直接的な方法でメレトスの告発を論駁することは、不可能だったのである。ソクラテスは伝統的な「神」概念とは完全に異なる「神」概念を持っていたのであり、そうしたソクラテスをプラトンは描いていたのである。

つまり、『ソクラテスの弁明』という場面的な連続性を持った作品を、内容的にも連続した作品であるとみなして読み解くことにより、先の「余

『エウテュロン』と『ソクラテスの弁明』の連続性について (小島)

剰」は解消出来たということになる。『エウテュロン』は、ある意味、『ソクラテスの弁明』のプロローグとなる部分であり、この「余剰」、すなわちソクラテスの「神」概念が伝統的なものと異なるという事柄が、『ソクラテスの弁明』のソクラテス像に効いているのである。

では、その伝統的なものと異なる「神」概念は如何なるものであったかを明らかにするには、稿を改めて考察を重ねなければならないが、本小論では少なくとも、以下のことははっきりしたと思われる。

プラトンが『エウテュロン』において描いているソクラテスは、「敬虔」について無知にとどまるソクラテスであり、かつ、伝統的な「神」概念を否定するソクラテスでもあった。そのソクラテスは『ソクラテスの弁明』におけるソクラテスと同一である。すなわち、今まで「余剰」と呼んできた部分で描かれていたことは、決して余剰などではありえず、『エウテュロン』で提示される重要なソクラテスの性格付けの一つであると考えられる。また、そういったソクラテスを描いている『エウテュロン』におけるある部分が（それを本小論では「余剰」と呼んだわけだが）、『ソクラテスの弁明』のある箇所のソクラテスと密接につながっており、またその部分が挿入されている理由は『エウテュロン』の中だけでは決して理解されない。よって、そういった部分が、一つでも、明らかに見出せるということから、『ソクラテスの弁明』と『エウテュロン』との間には、単に場面設定上の連続性にとどまらない、プラトンの主張としての連続性があると言える。

さらに言ってしまうえば、その伝統的な「神」概念を否定するソクラテスを描くことにより、従来の宗教上の「神」とは違う「神」をプラトンは考えていたことになる。また、その伝統的な「神」概念をもつ宗教家とソクラテスを「敬虔」について対話させた上でアポリアに陥らせたプラトンは、従来の「神」に対しての「敬虔」は本当の「敬虔」ではないということ、『エウテュロン』という作品において、主題的に主張しているということになる。

注)

- 1) McPherran (1985)、Vlastos (1989)などをあげることができる。
- 2) Allen (1970) がそうである。
- 3) おそらくそれは、そういった論者がソクラテスの哲学というものをプラトンのそれとは別に見出そうとする研究姿勢にも拠っているだろう。そもそもプラトンの執筆意図を中心には考えず、プラトンの作品をソクラテスを知る為の資料の一つと見ているのである。なお、そういった研究を否定したり批判したりするわけでは決してない。本小論では別の視点からアプローチしているだけである。
- 4) バーネットはソクラテスのしつこさに耐え切れなくなってエウテュプロンは逃げ出したものと見ている。かたや、アレンやディオゲネス・ラエルティウスに拠れば、エウテュプロンは自分の無知を恥じ、父親を告訴することをやめようとして立ち去ったということになる。
- 5) メレトスはまず青年たちを配慮している。しかし、ソクラテスが配慮するのは第一に自分であり、神託事件を機に特に話しかけていくのはそれなりに歳をとり評価もある人物である。そういった意識を働かせた発言であろうか。
- 6) 「パラドックス」と言われてはいるが、これは本当のところパラドックスとは言えない。「人は故意に悪をなさない」の「悪」は「自己の不利益」を意味しているからである。また、人が行動するときはどんな場合でも、その行動を選択しているわけで、その行動の選択の必然性を「よい」と言っているのだということも出来る。「選ばれたもの」は「選ばれなかったもの」よりも「よい」のである。
- 7) 『クリトン』47a-48a が好例。
- 8) 「ダイモニオン」は「ダイモン (神霊、半神、神的なはたらき)」の形容詞形を名詞化したもの、つまり「ダイモンのなもの」。

参考文献

- Adam, J., *Platonis Euthyphro*, Cambridge: Cambridge University Press, 1902.
- Allen, R. E., *Plato's "Euthyphro" and the Earlier Theory of Forms*, London: Routledge & K. Paul, 1970.
- Burnet, J., *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford: Clarendon Press, 1924.
- , *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford: Oxford University Press, 1973 (1st ed. 1900).

- Duke, Hicken, Nicoll, Robinson et Strachan, *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford: Oxford University Press, 1995. (定本としたテキスト)
- Fowler, H. N. (ed. & tr.), *Plato*, I, Loeb Classical Library 36, Cambridge; Massachusetts: Harvard University Press, 1914.
- Geach, P. T., "Plato's Euthyphro," *Monist*, 50. 3, 1966, pp. 369-382.
- Gerson, L. P., *God and Greek Philosophy*, London; New York: Routledge, 1990.
- Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy*, 6 vols., Cambridge: Cambridge University Press, 1962-1981.
- , *Socrates*, Cambridge: Cambridge University Press, 1971.
- Hicks, R. D. (ed. & tr.), *Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers*, 2 vols., Loeb Classical Library 184, 185, London: Heinemann, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1931-1938.
- James, J. H., *Plato Apology*, Illinois: Bolchazy-Carducci Publishers, Inc., 1977.
- McPherran, M. L., "Socratic Piety in the *Euthyphro*", *Journal of the History of Philosophy*, 23, 1985, pp. 283-309.
- , *The Religion of Socrates*. University Park, Pa.: Pennsylvania State University Press, 1996.
- [邦訳は、米澤茂・脇條靖弘訳、『ソクラテスの宗教』、叢書ユニベルシタス; 836、法政大学出版局、2006年。]
- Morgan, M. L., *Platonic Piety*, New Haven: Yale University Press, 1990.
- Reeve, C. D. C., *Socrates in the Apology*. Indianapolis: Hackett Publishing Company, 1989.
- Rose, G. P. (ed.), *Plato's Apology*, Bryn Mawr, Pa.: Thomas Library, Bryn Mawr College, 1989.
- Smith, N. D., & Woodruff, P. B., *Reason and Religion in Socratic Philosophy*, New York; Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Strycker, E. de., & Slings, S. R. (ed.), *Plato's Apology of Socrates*, Mnemosyne: Bibliotheca Classica Batava; Supplementum 137, Leiden; New York: E.J. Brill, 1994.
- Vlastos, G. (ed.), "Socratic Piety", *Proceedings of Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*, I, 5, 1989, pp. 213-238.
- West, T. G., *Plato's Apology of Socrates*, Ithaca; New York: Cornell University Press, 1979.
- West, T. G., & West, G. S. (tr.), *Four Texts on Socrates*, Ithaca: Cornell University Press, 1984.

田中美知太郎、『原典 プラトン ソクラテスの弁明』、岩波書店、1950年。

田中美知太郎・池田美恵訳、『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』、新潮文庫、新潮社、1968年。

田中美知太郎他訳、『プラトン全集』、岩波書店、1975年。

三嶋輝夫・田中享英訳、『プラトン ソクラテスの弁明・クリトン』、講談社学術文庫、講談社、1998年。

三嶋輝夫、「ソクラテスと神—ギリシア思想における信と知への一視角—」、日本倫理学会論集『信と知』、28、日本倫理学会編、慶応通信、1993年、3-18頁。

(哲学科 助手)